

## 2023 沢便り4 檜枝岐をさまよう極楽トンボたち

実川・赤倉沢遡行／硫黄沢下降 (2023/7/23-25)

平日を利用して味わいのある山旅を楽しむシニアユニット『大人の平日倶楽部』。今回は檜枝岐・実川へと向かい、花沼湿原という秘境を見に行く計画である。

早朝、道の駅前方にある小山を見ると上部が白い霧に覆われているのが見えた。I崎さんが天気予報を調べると

「夕方雷雨だよ。今日より明日の方が天気いいな。1日ずらすか。」

一泊二日で実川を往復し、下山後は料理自慢の宿で打ち上げという優雅な計画を立てていたが、その予備日を使おうというわけだ。

まる一日時間が空いてしまった。山に入らないと僕らは陸に上がった河童みたいなもの。せめてトンボでも見に行こうと宮床湿原に行くことにした。それから木賊温泉の岩風呂へ行ったり写真展を見たりしてのんびり過ごす。

入道雲が沸いていたが、檜枝岐はのどかないいい天気で午後も穏やかに過ごす。結局雷雨はやって来なかった。

急なお願いにもかかわらず宿も日程変更に応じてくれて、朝はお弁当にしてもらい早立ちすることができた。

5:20、七入に車を停めて出発。昔は4km先まで車で入れたらしいが、堰堤の手前が崩壊したためにまるまる歩かねばならない。

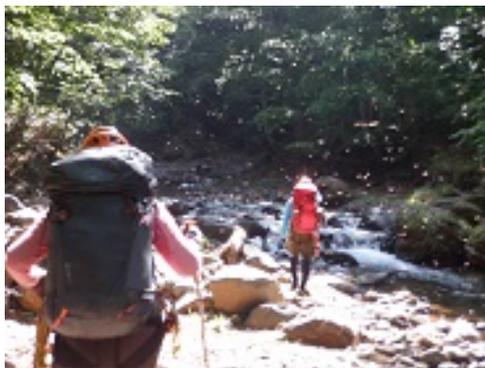
赤安沢出合の手前辺りで二本目の休憩を取り、宿で作ってもらったお弁当をいただく。こぶし大のでっかいおにぎりが2個と美味しいおかずが詰まっていた。

沢靴に履き替え、アプローチシューズをデポして歩き出す。下りられそうな所を探しながら進み、斜面を下って実川の流れへ下り立った。

そこにはトンボが乱れ飛んでいた。河原の岩にもびっしりトンボが貼り付いている。

「こりゃあトンボ天国だなあ。」

昨日わざわざ珍しがってトンボを見に行く必要もなかった。歩いて歩いてトンボ。シャツにも留まりザックにも留まり、アブよりマシだがどうにかしてほしい。



ゆるい流れが続いていた。1時間ほど歩いて2mちょっとの滝が出てきたがナメで手掛かりが無さそうなので初めて巻きを選ぶ。その後はナメ床が始まり心地よい遡行が続いた。

途中、胸までの深さの淵が出てくると

「ここが泳いで取り付く所かねえ。」

「いや、Tさんに活躍してもらう場所はまだ先でしょう。」

流れが右に折れるとナメの滝が立っていた。ここは上がれないので右岸を巻く。小さい巻きで終えたかったがその先に続くナメ滝も上がれそうにないため続けて大きく巻くことにした。横切った沢筋の先に大きな土管が見え、近くに林道が横切っていることがわかった。

またしばらくきれいなナメ床が続き、さらに進んだ先に二条に分かれた3 mナメ滝が落ちていた。これも巻きだ。右岸を巻いて滝の上に下りると少し先にトラロープが垂らしてあった。

「ああ、帰りはここ上って林道に出るんだな。すると向かいの上がコルだろう。」

ここから流れはコの字型に曲がって行く。帰りはその間にあるコルを通りショートカットしてここへ下りてくることになるわけだ。

「あの辺から下りてきた方が楽そうだな」とコルからの下りルートを描いてみた。

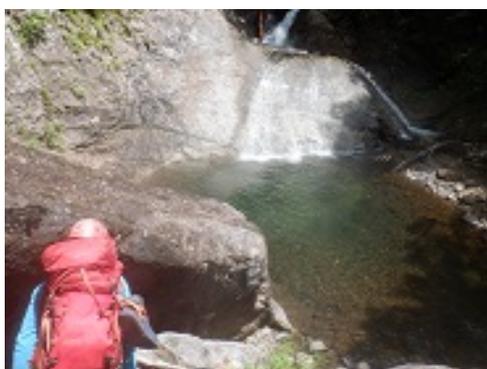
腰までの淵を越えた先にまた立ち上がったナメ滝。右岸の凹角を高巻くが結構上まで上がられる。高所のトラバースでは

「しっかり笹持って」とI崎さんから声が上がる。

そのトラバースの途中、

「おい、何だい、あれ。」

流れがさらに右に折れながら2段7 mのナメ滝となっていた。右岸はスラブになっておりこのまま巻いては行けない。いったん沢へ下りて左岸を巻くことになりそうだ。



滝を下から見ると下段はポコっとおにぎりのようなナメになっていて途中までは行けそうだが、上部に手掛かりが無さそう。記録では泳いで右岸側のスラブに取り付いたようだがその取り付きも難しそう。左岸側は土の斜面になっていて上方に横切っている筋が見えた。あそこを狙ってはどうか。

「大丈夫？行ける？」

土の斜面に取り付いた。足元が緩く上がりにくい。トラバースの高さまで辿り着く。しかし筋は下から見たよりも取り掛かりにくそう。草が無く有効な手掛かりが無い。獣が横切った跡だったのである。筋に合わせて慎重にトラバースし何とか先の岩場に辿り着いた。しかし二人目、三人目が通るには足場が悪い。それにせつかく滝上に届いたのに僕はロープを持っていなかった。ロープの先に錘を付けて下から投げてもらおうかと思えたが

「それは無理。一段目の上まで下りて来て。」

I崎さんが荷物を下ろしロープを付けておにぎりを取り付いた。上からシュリングを垂らしてサポートしてくれと言うわけだ。滝を一段下り、シュリングを2本繋げて垂らすとそれをきっかけにI崎さんがおにぎりを上がり切った。そのまま上まで行って木にロープをセットすると荷物を取りに一旦下降する。かくして滝の上に3人立つことができた。

「いやいやいや、こりゃ大人の平日倶楽部の来るような所じゃないな。」

難所の先は広く平らなナメ床で天国のように感じられた。そう口にする

「このまま天国が続きゃいいんだけどな。」

赤倉沢出合までに右岸から2本の沢が入って来る。1本目の沢が入って来た所で休みを入れた。

「もうあとちょっとだな。」

2本目の沢に出合ったが、それが赤倉沢だった。どうやら1本見過ごしたらしい。硫黄沢が右に伸びる左岸側が台地になっており、そこが今日のテン場候補地である。時計を見ると13:00。7時間40分の行程であった。

台地は下草に覆われどこを選んでもいい。焚火する場所と合わせてタープを張る位置を決め、焚き木を集め始めた。すると

「いいよ。釣り行ってきなよ。」

「期待してるよ。」

赤倉沢に入ることにした。竿を伸ばし出合に近づくと魚が走った。しまった、釣りたい気持ちがはやるあまり迂闊だった。でも魚は居る。

いくつ目かの落ち込みで24cmが掛かった。背の模様がきれいだ。さらに進んでもう1尾。しかし調子がいいのは東の間だった。

大きな岩の陰に魚が居るのが見えたが目が合ってしまった。毛鉤を送ってみるが気づかれているのでそのうちスーッと姿を消してしまう。

5mナメ滝の下でも魚に走られる。二俣まで行ったがその先はボサが掛かるので引き返すことにした。あと1尾、何とか釣り上げたい。大きな岩の定位置にはまたあいつが戻っていたが、相変わらず相手にしてくれない。

出合まで戻り硫黄沢に入ってみるが魚の気配無し。もう一度赤倉沢に戻って滝下まで探ってみたが…、残念。

テン場に戻ると二人は焚火を囲みマシュマロを焼いたり枝豆を茹でたりしていた。「お帰りなちゃ〜い。」

「I崎さんもう酔っぱらっちゃってるよ。」

2尾しか持って帰れなかったけれど二人は喜んでくれた。

まずはビールをいただきます。「はい、これ」とI崎さんからアルミホイルに包まれたものを渡された。ホイルを開けるとタドンのような真っ黒いものが出て来た。

「我が家で採れたじゃがいもだけど焚火が強すぎた。割れば中は食えるからさ。」

道の駅で仕入れた太いアスパラガスが出された後、Tさんが今晚のメイン料理ネギ抜き麻婆茄子を作ってくれた。

そうしているうちにイワナもいい具合に焼けたので、バラシて食べることにする。これには日本酒を合わせたい。I崎さんが900mlの箱酒を持って来ていた。

「I崎さん、日本酒少しいただけませんか。」

「えっ、これ？もう無いよ。」

「えっ?!」

「いやいやいや、だってホリホリ釣り行っちゃって遅いんだも〜ん。」

一人で空けちゃったのだ。そりゃあご機嫌なわけだ。

長い行程だったおかげで19:30にはみんなタープの下に入って行った。



4:00起床。まだ薄暗い中、ヘッドで朝食を始める。I崎さんが用意してくれたのはラーメン。会津らしく朝ラーである。

今日は赤倉沢を突き上げて花沼湿原を目指し、硫黄沢を下降していったんここまで戻り、コルを抜けて七入まで戻るロングコースだ。荷物をデポして5:40出発。

昨日釣り上がった沢筋を遡行して行くが、目が合って相手してくれなかったあいつは姿を見せなかった。

二俣を越え、昨日釣りをやめた先からは倒木帯となる。狭い沢筋の倒木はいつまで経っても片付かないだろう。しばらく続いた倒木帯が終わると、高さはそれほどではないものの立ち上がった岩壁にいやらしい巻きを要求される。

シャワークライミングで濡れると、まだ陽が射して来ない沢筋では衣服が冷たく感じられた。

3時間ほど歩いてようやく水が涸れてくる。高度 1,900mを越え前方が明るくなると I 崎さんが「湿原間近〜！」と声を上げた。

台地となってからも湿原までは意外と長かった。南西に向かって森を進んで行く。そして 9 : 20、ようやく花沼湿原に出た。広い空間がぽっかりと開いていた。ザックを下ろしその上に腰掛ける。静かで穏やかな場所だった。

ここにもトンボがたくさん飛んでいたが、足元をよく見ると食虫植物に捕まったトンボが結構いる。秘境の湿原はトンボにとっての天国と地獄が共存している場所であった。



苦勞して辿り着いた湿原であったが帰りの時間も掛かりそうなので 15分ほどでトンボ返りとした。

「俺と T さんと出発するの早いんだよ」と歩き出しながら I 崎さんが言った。

「ここまで3時間半ちょっと掛かったけど、帰りは2時間半くらいで行けるかな。」

進路を西に取り沢型に行き当たり下りて行くと沢床が赤茶色い硫黄沢に出合った。標高は高いが結構水が流れている。

1時間歩いて一本取った後、いよいよ核心部が始まった。いきなり下が切れ落ち 2段 10mの滝の下降となる。右岸の際から I 崎さんが一段下りたが

「ここから下は懸垂だな」と上部の木にロープを取り付け、ロープを垂らし下へと下りて行った。

懸垂下降で下りたもののその下もまた落ちていた。しかし覗き込むと何とか下りられそう。気が付くと先ほどの滝の所から沢床の岩がクリーム色に変わっていた(硫黄成分か)。滑りそうでいやらしい。

さらに急な下降が続く。お尻の摩擦を使ったりしながら慎重に下りて行った。しばらくして位置を確認すると

「まだここか、結構時間掛かるな。」

そんな折り、左岸の上部に動くものがあった。カモシカだ。向きを変え急な斜面をトラバースする。早い。あの斜面にあった筋もきっと彼らがつけたものだろう。

右岸から沢が出合うとあともう少し。沢が右へ折れる所でコルまでの上り口を確認してようやく 13 : 00、デポ地まで戻った。3時間 20分、往路と同じくらい時間が掛かったことになる。

荷物を回収し 13 : 20、デポ地を後にする。先ほど確認した上り口から取り付きコルへと上がるが笹藪が密に茂っていて方向が定まらない。それでも I 崎さんが藪を掻き分け沢型に辿り着いた。

沢型は切れ落ちるように下の川へと続いている。途中の 2mの岩壁では「上りなら何ともない壁だけど下りだからさあ。三点支持さえちゃんとすれば下られるから。」

14:10、実川の流に再び下り立つ。そこは二条に分かれた3mナメ滝のすぐ下だった。下りて来たかったルートよりもだいぶ下に来てしまったわけだ。それでも無事下りられたので良かった。

実川を下りながら右岸の上がれそうな所を見つけて上がって行くと林道の下を通る土管が見えた。そしてようやく林道に上がる。後はこれを七入まで歩くのだが、どれくらい掛かることだろう。

デポした靴を回収すると七入まで後2時間くらいだろう。それぞれのスピードで歩いて行く。もちろんトップはI崎さんだ。

林道の分岐を越え、堰堤の崩壊地を越えて行く。対岸にキャンプ場が見えてきて17:00、車まで戻った。今日は11時間20分の行程であった。

「絶対これ大人の平日倶楽部の来るような所じゃないよな」とI崎さんが言ったが、久々の大冒険にとっても満足気なのであった。本当はこの後、宿で打ち上げという流れだったらもっともっと良かったんだけど。



(H口記)